

官舎だより

官舎團長

三月迄此の官舎に居られた人々が皆出られて今迄賑き事爛漫たる花に集ふ蜜蜂の如く樂しき事恰も四時百花亂れ咲き常に幸福もて満されてゐるとか稱する極樂淨土の如き官舎にも冬枯の如き淋しき訪れ固く閉ざされた門戸は邊を行き交ふ人々に物足なさを覺えさせてゐたが本年度養蠶科卒業生W・Kと紡績科卒業生K事團長の三人にて五月六日鐘太鼓鳴物入りとまでは行かぬが兎に角用意萬端整へ花々敷く開舎致しました故在官者一同に代りまして生氣にも官舎だよりを記し新開の御挨拶に代へる次第であります。目下此の官舎に養蠶期中十二回卒業生のYさんと本年度卒業のI君が臨時に宿泊し南の官舎には昔通りK・O——二人とも遂之の間正八位陸軍少尉と云ふ殿しい名前を頂戴したばかりである——の御二方種が暮して居り官舎の別荘に大正十五年度の應援團長で蠶専第一の美男子との評あるYさんが住まつてゐるので大分振い

新入舎の三人は至つて變り者の呑氣坊主で新團長は學生當時本姓を云ふよりニックネームを呼んだ方が分り安い程の蠶専第一の名物男蟬入道で前團長にも劣らぬ強の者で一人で大騒ぎをやらかしてゐる。Wは柔道二段の肩書を有する腕達者故夜も戸締せず舎中開け放ち体にふさはしいどでかい鉾をかい、枕を高く安眠出来る。正に官舎の用心棒の形である。

× × × × ×

以前の婆さんが退職したので新に炊婦を雇ひ入れ官舎獨特の料理——人呼んで官舎料理と稱す——をたらふく食つてゐるが其の美味たるやですな……まあ止めませう。唾液が瀧の如く滴り落ちるといけぬから。まあ兎に角官舎料理を一度口にしたら他所での食事は味覺が承知しない程である。むべなり蟬入道は三年間寄宿舍生活をし炊事に關しては大いに心得あり且つ「ナベ」と呼ぶ炊婦には正に適せる名前の所有たる婆さんの作る料理ですもの。

目下養蠶期なので毎日平均十人程一時に食事する爲め非常に賑ひ食事中の談話こそ天下一品の名ある事疑なし。如何なる珍談が開かれるかまあ、御來田を機會に是非御立寄り御聞きを願います。

× × × × ×

時々天下廣しと雖一つあつて二となきK君のステツブダンス蟬入道の蝋燭の餘興を取入れ子供に如く笑ひ興じる事もあり頭の頬げかゝつた古き同窓生も若返り學生當時の氣分に浸る事が出来る。官舎こそ若返りの最良妙藥なり若返らんと欲する人はすべからく一度は官舎に出掛られる必要あり。

乾廟室新築の爲め古い庭球コートが潰され官舎の東横手に廣々した
 コートが新設せられ食後は總動員で猛練習を行つて居る。現在
 では相當強い？官舎チームが出来た故試合御希望の向きあらば何
 時にも御手合せ致す考であります。但しネットもなくアウトも
 なしの試合に限りませす。

餘り官舎の楽しみ多き事のみを書き立てると同窓生等の官舎へ
 〳〵と押し寄せ楽しい官舎も人の洪水にて押し流される怖ある故
 之れ位にて止めます。
 最後に官舎を御訪問下さる方は土産物澤山御持参下さる事を切に
 御願ひ致します。大食官食ふ一等の連中のみ鬼の楯に就んで居り
 ませ故。

海外通信

杭州から

三九郎

中國に來て一年……と書いて、ある友人から「浙江の片田舎に
 一年ぼつち居て中國が聞いてあきれると叱られた。なる程それ
 に違ひない。田舎もいゝが一年間何をして過したんだ」とい
 ふ叱責に會ふとグーの音も出ないことになる。

それで勢ひ俺の渡支の意義からこゝに於ける生活の打端につき
 再吟味をしなければならぬのだがなまじつかなことを書くとき
 た叱られる恐れがあるから當分預りとしてこゝには當らず觸らず
 の印象を断片的に少しばかり書いてみることにする。

大

まず二次元の置きは兎も角として三次に人間をもつて來るとそ
 の數にあきれる。數字は別として何處の町へ行つても——そんな
 に澤山行つて見た譯ではないが實際何處もさうらしい——夥しい
 人間が群集してゐる。何の爲にこう澤山集り、またどんな生活の
 手段を有つた人達が皆目見當のつかない群が街に溢れて居る。街
 に起るほんの一寸した事件にも一瞬にそれを取り巻く群衆の數は
 たゞ驚くといふより外云ひ様もない。四次の時は何物文化からも
 思想からも現代の先端から逆にあらゆる時代を経て太古まで貫い
 てゐる。そしてこれは個人的にも集團的にもまた地方的にも極めて
 複雑な線の集合から出來てゐる爲め不可解な支那を形成する最
 も大きな要素となつてゐるのである。

四次元世界からその大ききその豊富さに於てこの國の足許にもよ
 れる國がどこにあらう。實に大中華である。

蒙古來

神戸を出て第二夜が明けた。朝突如蒙古の大軍の襲來に遭つて
 度肝を抜かされた。何百とも知れぬ異様な船が一面に行手を塞い

でしかも無敵（敵はなかつたが）堂々とこちらに向つて押し寄せ
て来るではないか。その船、帆の形、それらの色彩とその数の威
壓はおかしいけれども蒙古來を想像させたのである。

この漁船の群は俺が見た最初の支那であり餘りに俺の知識から
かけはなれた形相で特に時間的に蒙古來を想像させる程古めかし
く感じさせた。

水の色

朝飯をすまして外へ海を見てまた驚かねばならなかつた。海と
いへば青いもので例外として黄海と紅海とあるといふのが俺の海
の色に對する知識の全部であつた。ところが何時の間にか船は不
透明な黄褐色の水の上に浮いて居る。楊子江に入る時刻でもな
い。褐色が濃くなつたがいつまでも行手に陸らしいものゝ片影も
見えては來ない。こゝで楊子江の水の色とその吐き出す水の分量
に就いて全然無知な俺であることを知つた。

大陸

大陸は靜かな水の中に深く震んで柳らしい木の長い一列で前方
左手に姿を現はした。それは期待にもかゝはらずその奥に何の連
想も起させない程簡單な一本の線にすぎなかつた。よほどして右
手にもそれに似た線が見え出した。黄色く柔らかな春の水のひろ
がりにくつついたにぶい色の線―厚さも廣さも失つて大陸はまづ
一次元で現前した。

國際都市

上海をさう呼ぶものは一應尤である。然しその存在は極めて不
自然であり不安全であることがしばらく居ると知れる。列強が支
那搾取の足場として築き上げた近代文明の都市様式は然しながら
餘りに表面形式的でその地下にそれを包む空気にどうする事も出
來ない何かが残され漲つてゐる。従つてその榮華は鉢植の觀帶植
物の繁茂とでも譬へやうか。

四等車

南京行の館詰の三等車。しばらく立ち續けた後やつと腰を下ろ
せたのが公園のベンチの様な木の腰掛である。この列車で俺が學
んだのは混雑に對するこゝの人の示す態度である。站々の乗り降
りの喧噪はすさまじいものであるが人々には共通の落付がある。
人を分けて通る人が殊更に懇願をして道をあけて貰ふこともしな
ければ通ず人が特別の厚意（卑しい）も示さない。然も極めて自
然に近い動作でそれが進行する。混雑から受ける苦痛を小さな感
情に吐き出さないでは居られない―やうな人の多い―國から來て
は甚だ氣持のいゝものである。

まだ四等車があるのだが俺はまだ乗つて見ない。

外國人

蘇州站で四人づれの日本紳士が乗つた。こゝは二等車だ。その

話の様子で上海から日歸りの蘇州見物の歸途であることが知られる。四人向き合つて傲然たる態度、茶の斷り方と蘇州日本租界の櫻がまだ少なすぎ花見の設備が不完全であること等を驕高に話し合つてゐた。この國に來てゐる日本人に反感を持ち出した最初である。

然しこの國に住む總ての外國人の目的が直接又は間接に支那搾取である限り同じ反感はそのやり場に苦しむだけである。延いてこの國の民衆がその支配階級と帝國主義列強とに二重に搾取されてゐる悲慘な境遇に就いて考へない譯に行かなくなる。

おもしろい

上海を歩いてみると日本の漬物が如何にみずばらしくまた時代はなれをしてゐるものであるかを知る事が出来る。どうも鼻目に見てもキモノは室内着と日本様式の家の周圍から出る資格はないやうだ。

ズボンを書く女の跋扈する時代のことを誰か云つたがここの女は昔からズボンを穿きその上に今度は髪を截つたといふ譯だ。

恐るべからぬ(たのもしや)

日本人で事業の成功者の一人現にその經營してゐる工場は年毎に好成績を示してゐる人の話。

この國の人の持つ頭よき、器用さ——特に技術修練の速さ、

度胸のよき、掛引きの上手さ等々驚嘆の外はない。たゞ現在はそれが部分的分散的にしか發揮されない——これまで必要がなかつたのだらう——ためにこんな工場の經營もどうやら相當な成績を擧げて居られるのである。然しそれらの特質がこの國の持つ偉大な富の潛勢力と結んで擡頭する時——それは餘り遠い先のことではない現にあらゆる方面にその芽が伸び出してゐる——諸外國は指を啣へて見て居るより外なくなるだらう。(六、十一、寛橋で)

この様な形式でこれからも出来るだけつゞけて書くつもりだ。この次からはもつと長くかけるだらう。

アメリカに於ける日本俱樂部

より蒲生理事長に宛てたる寄

せ書きの一節

原田先生の御來紐を機とし同窓生四名相集り上田氣分に酔うて居ります、はからず兄の御病氣事を承り非常に憂慮して居ります切に御自愛專一を祈る。

二十年前東寮の二階に机を並べし事今更の様に思はれます

松村 愛信

原田先生御元氣にて御來紐、今晚同窓生四人集り共に話しを致し候 貴兄御病氣の由御身大切になし被下度、御勇健にて御活動の程祈上候

水野 健吉

原田先生と共に愉快に夕食を喰つて居ります、貴兄の御病氣の話を聞きました驚きました、然し今頃は御全快の事と在じます、今後其御自愛の程御願申上ます

依田 信一

同窓諸君に久振りでお目にかゝることは日本でも何よりうれしいことですが海外ではどんなにうれしいことであるかは御推察が出来るませう、今日は國を去つて二年間一番うれしい日でした皆さん元氣に活動してゐられます一ヶ月の後貴下にもお目にかゝれます御身大團に願ひます

原田 親雄

あなたの御病氣のことは少しも存じませんでした今日原田先生から聞いて驚いたやうな次第です、何如ですモウよろしいですか、向暑の折柄でもあり御自愛專一に祈ります、この暮には歸國しますからまた御伺ひいたします

森田 三郎

快 著 三 書

頃目 本會々員であつて學界に多大な貢獻を齎らし好評噴々たる著述を爲したものが三つある。

日本桑樹栽培論—猿藤保太郎、樋口珠鑾兩氏共著、コロイド化學要論—金子英雄氏編、菌數生物學—八木誠政小泉清明兩氏共著、之である。

日本桑樹栽培論は猿藤博士が海外から歸朝されるや否や樋口助教と共に稿を起し三ヶ年の日子を費し、内外の著書を漁るは勿論、最近十ヶ年の成績を悉く網羅し著者が桑樹栽培學に獨自の新生命を拓いた桑の生理學的研究を根柢として著作された堂々八百四十頁に余る老成なる著書であつて、殊に忘れ得ないことは樋口君が本書を正に脱稿せんとする寸前に、不幸不歸の客となり其の血潮に彩られて初階を上げた掛け替への無い嬰兒であることである、其の巻頭に針塚校長は一詩を賦して同氏の死を悼んで居る。

世にまきば 學びのはてに至り得ん

きみそ惜しけれ身まかりませる

又猿藤博士も同氏の死を非常に悲しみ「故人の英靈に捧ぐるの使命を帯びて一層出版を急いだ」と記載されて居る。これこそ眞に心血を濺いだものであつて尋常一様の書籍と其の選を異にする所以である。

其の内容に至つては桑樹百般に亘つて余す所なく王言珠語今更喋々を要せない、凡て關係者はなくてはならぬ至寶である、發行所—朋文堂 價—六圓五十錢

コロイド化學要論は本校化學部に於て膠質化學を專念に研究して居る、金子教授の編著である。

云ふ迄も無く近時物理化學の發達に伴ふコロイド化學が著しく成長を遂げて來た、吾々の周圍に親しんで居る桑葉蠶体繭或は土壤等みなコロイド状態にあるものである此等に對して深く其の状態や行動を研究し観察するにコロイド化學の知識が必要となつて來

たので生体コロイド化学を中心に置いてコロイド化学入門の手引にもと編纂されたのが即ち本書である。第一編に於てはコロイド現象の正しき深き觀察の基礎と理解の力を修ふべき物理化学の一端を論じ、第二編に於てはコロイドの世界の特性や行動について略述して其本性を明かにし次に第三編に於てコロイドと自然物との關係を畧記して自然物中のコロイド性を呼び起してある。養蠶方面に必要なものとしてコロイドと蛋白質、コロイドと炭水化物、コロイドと生物体、コロイドと酵髮、コロイドと土壤等を述べ製絲紡績方面に必要なものとしてコロイドと纖維、コロイドと染色、コロイドと脂油、コロイドと石鹼等が述べてある、之を要するに生体に對する觀察と研究とはコロイド化学的知識も亦極めて重要な要素であるのでコロイド化学の知識を平易に知り概念を修めて更により深く研究せんとするものにとつては非常に便利な本である。

筆者は其の是非を批判する力が余りに薄弱であるが、専門家に言はせると非常によく纏まり整つた著書であつて此の方面の研究者には是非なくてはならぬものであると云ふ、敢て會員に御奨めする所以である。

發行所—培風館 價—四圓

函數生物學は本會正會員八木博士と小泉學士との共著である。從來本邦に於ける生物學は生物の分類、形態、遺傳等に關する著書が多くて未だ生物を動的に取扱つた學者が寔に微い、著者は序に於て—此の生物現象を動力學的に分析した生物學書が今日非常

に要求され本書は其要求によつて生れた所産である—と述べて居られる、要するに醫學を初めとし農業、水産、養蠶等の生物を取扱ふ學問が今日迄最も重要な生理學及生態學を等閑視して居たものであつて夫れを取り出して函數學的に取り扱つたもので此の方面に於て全く獨自の新生命を拓いた著述であることを疑はない。

如斯く本會々員にして今日の新進なる學界に新生命を拓いた創始者を持つことは本會の誇である、紙質体裁共に優美で凡そ生物學徒になくなくてはならない至寶である。

發行所—葦華房 價—六圓五十錢

序に 吾が會員であつて著述をされた著書名を上げて見ると次の如きものである、或は之より澤山あるかも知れない、日常吾々の眼に就いたものを上げたのである、本會では昨年故樋口君寄贈の書籍を基礎として漸次書籍を集めて居る、今後會員が著述された時には是非御寄贈が願ひたい本會報でも紹介する、つまり一舉兩得である、尙前項に上げた著書以外にもあるかも知れない御通知下されば次號に載せる虫の良い話だが其の時に一書御寄贈願ひ得れば尙更結構である。尙前掲中の大部分が本會の圖書の中にならぬものも一つ御寄贈に預りたい、何斷廣告をして置いて後から廣告將請求と云ふ鹽梅になつて了つて濟まない次第である。